

広島大学キャンパス・ユビキタス・プロジェクトにかかる 英語授業の実践（その1）

榎 田 一 路
前 田 啓 朗
磯 田 貴 道
田 頭 憲 二

広島大学外国語教育研究センター

1. はじめに

本報告は、広島大学において平成16年度に企画が開始され、平成17年度から実施が行われたキャンパス・ユビキタス・プロジェクト（以下、CUP）に関連して実践した教養教育における英語授業を報告するものである。

CUPは、情報政策室の主導のもと、学生がいつでも・どこでも、自由にネットワークを利用できるようにするという理念のもとで、新入生に対するコンピュータ購入の推奨や、無線LANをはじめとする学内のネットワーク環境の整備、下宿への高速回線網の整備等を企画している。

平成17年度の新入生に対しては、経済学部昼間コースと工学部第四類（建設・環境系）において推奨モデルの選定と学生に対する推薦が行われ、生物生産学部では新入生に対してノートパソコンを所有することを推薦した。

そこで、学生がパソコンを所有し、ネットワーク環境もより良いものになりつつあるという状況に対応して、英語教育ではどのような実践を行うことができ、学生の英語力を伸長することができるのかを検討することとなった。

2. 本実践開始に至る経緯および本実践の目的

平成17年度は、経済学部昼間コースの1年次生を対象とした教養的教育の英語科目において、CUPの実現を前提とした授業実践を行った。対象となる学生集団は、広島大学の新入生の中で平均的な英語力を持つと考えることができると判断されたことが基準となり、長期的には全学に広げることを見据えた教育実践に適すると判断できたためである。平成17年度入学生の5月時点のTOEICスコアは、全学の学生のうちの受験者（ $n=2,485$ ）では平均444.3・標準偏差113.0であり、対象の学生のうちの受験者（ $n=151$ ）は平均461.9・標準偏差83.7であった。

また、1年次生は前期に2クラス（コミュニケーションIA・IB）、後期に2クラス（同IIA・IIB）を履修するが、そのうちコンピュータを用いた学習に向きやすいIB（読むこと中心）とIIB（聞くこと中心）の授業を対象とすることとした。

指導には、CALL（Computer Assisted Language Learning）教室を用いて授業を行った。CUPではあくまでパソコンの所有を推奨するものであり、指定機種を購入を強制するものではないため、授業の中でコンピュータを利用するには外国語教育用に映像・音声の伝送などに特化して機能を強化したCALL教室が不可欠であった。

教材には映像・音声や各種解説を備えたCD-ROMが付属した市販教科書を利用することで、学生の所有するノートパソコンを活用した指導を行った。この際、3名の担当教員が年間を通じ

て、特定の学生を担当することにより、教員間での教科書や授業内容の統一を図った。

また、独自に WBT (Web Based Training) 教材の作成を行い、学生にネットワーク上で様々な課題を提供することにより、ネットワーク環境を活用した課外における学生の自主的学習の支援を行った。

このようにすることで、本学の CUP が目指すネットワーク環境のもと、そのネットワークを有効に活用した英語授業の方向性を示すこととした。以下では、本実践で行われた取り組みの詳細を報告する。

3. 具体的な実践内容 (2005年4月～12月)

ここでは、2005年度4月から本稿の執筆段階までの取り組みを振り返ってみたい。まず本学経済学部1年生を対象とした CUP にかかる英語教育の基本方針を概観する。次にその具体的内容について、使用教材、毎回の授業の流れ、成績評価の各観点から述べていくこととする。

3.1 CUP にかかる英語教育の基本方針

今回の取り組みにあたっては、担当教員である本学外国語教育研究センターの3名(榎田・磯田・前田)が事前に会合し、以下に述べる基本方針を共通認識として確認した。また、授業期間中も、定期的な会議の場やメーリングリストによる意見交換を通じて、教員間の連携と意識統一を図ってきた。

・クラス編成と担当教員

CUP の対象科目「コミュニケーション I B」「コミュニケーション II B」につき、3レベルの習熟度ごとに通年で同一の教員が担当することにした。前者は1年次の前期、後者は後期に開講され、それぞれ英語のリーディング、リスニングを中心とする教養的教育科目である。従来この2つは独立した科目として扱われているため、それぞれ異なる教員が担当することが多く、また教員間で教科書や授業内容の統一や、共通認識のもとでの取り組みといったことは特に行われてこなかった。本取り組みにおいては、上述のような教員編成を取ることで、年間の授業内容に連続性を持たせ、夏季・冬季の休業期間中も含めた、長期的な授業実践に取り組めるようにした。

これとあわせて、レベル間で教科書を統一し、授業の内容と進度がある程度統一することとした。習熟度別クラスは5月の学内 TOEIC スコアに基づき後期に再編成されるが、その際にクラスを移動した学生に混乱を生じさせないためである。

・頻繁な小テストと授業時間外学習の重視

授業で学習した内容の定着度を向上させるため、小テストを頻繁に実施することとした。具体的には、毎回の授業開始時に、その日の学習範囲に登場する重要単語のテストを行うとともに、ほぼ毎月1回、それまでの学習内容の復習テストを行うこととした。また、WBT による復習問題を、個人所有のノートパソコンや学内のパソコンを利用して授業時間外にも行えるようにした。

・TOEIC スコアアップの明確な意識

初回授業でシラバスを説明する際、TOEIC のスコアアップを明確な目標として挙げ、授業内で TOEIC 対策の教材や参考情報等の提供を行うことで、学生の意識向上を図ることとした。本

学では全学学生を対象とした学内 TOEIC を実施しているが、2 年次に開講される「チャレンジ TOEIC(R)」などは例外としても、教養的教育、特に1 年次の英語の授業において、今回のような組織的取り組みによる、スコアアップを目指した自主的学習の促進はほとんどなされてこなかった。それゆえに、教員からの意識的・組織的な働きかけが学生の TOEIC スコアに及ぼす影響の有無を調べることは、本学における今後の英語教育にとっても有用な結果をもたらすものと思われる。

・ CALL システムの使用

授業には CALL 教室を使用し、WBT を中心とする CALL システムを効果的に取り入れることとした。CALL を利用する一般的なメリットとしては、「フィードバックが速い」「限られた時間で大量の問題を消化できる」「音声と映像を組み合わせた練習が可能」「教材のアーカイブ化と、教員間での教材の共有が容易」「学習履歴の管理が容易」などが挙げられる。加えて本プロジェクトにおいては、授業時の CALL 教材への習熟が、個人所有のノートパソコンを利用した課外学習を促すという相乗効果が期待される。担当教員は、いずれも CALL を用いた教育・研究経験を豊富に有しており、上述のメリットを最大限に引き出せるよう、教材や授業方法の開発・研究に取り組むことを目指した。

3.2 使用教材

(1) 教科書

各クラス共通の教科書として成美堂の『Inside Stories U.S.A. with Multimedia : CD-ROM で学ぶアメリカ文化』を採用した。これはリーディングを主とした教材で、一レッスンにつき、Basic と Advanced の 2 レベルの長文が用意されている。いずれも標準的なアメリカ英語で書かれており、TOEIC をはじめとするいわゆる実用的な場面で必須の語彙が用いられている。題材もアメリカ文化生活事情に関する学生に比較的親しみやすいものであり、使用語彙をあらかじめ習得しておけば内容理解はさほど困難ではないと思われる。また、教科書には動画、音声、語彙や文法の説明といったコンテンツで構成される CD-ROM が添付されており、学生はこれを用いて各自のパソコンで自習することが可能である。このように内容のレベルと本プロジェクトの性質を考えると、同書が最もふさわしい教科書であると判断した。

(2) 教科書準拠教材

上述の教科書を中心に授業を展開する一助として、学生の理解を助け、学習内容を定着させるための準拠教材を独自に作成した。その大多数は WBT 教材として学生に提供し、特に復習用の一部コンテンツはインターネット上で授業時間外も公開した。WBT 教材の作成および配信には、安田女子大学（広島市安佐南区）により開発されたネットワーク型教材作成・配信システム YASUDA SYSTEM などを利用した。ここでは、毎回の単語テスト、音読・シャドウイング用音声素材、復習問題、そして夏季・冬季休業期間中の課題に利用した単語の復習用教材について説明する。

・ 毎回の単語テスト

毎回の授業の冒頭で、その日の重要語彙の穴埋めテストを行った。媒体は当初用紙を配布していたが、その後一部クラスで WBT に切り換えた。これは、(1) 印刷のみならず、配布・採点・

回収・返却の時間を省くことができ、授業時間を有効利用できる、(2) クラス間で問題を共有し統一化するのが容易である、(3) 点数の管理が容易である、などの理由による。作成には YASUDA SYSTEM の選択・記述問題作成システム「QM システム」を利用した (図 1)。

・音読・シャドウイング用音声素材

近年、授業の中で音読やシャドウイングなどの練習を取り入れる動きが活発となっており、多くの実践・研究が行われている。これは、大学におけるいわゆる伝統的な英語授業の問題点としてよく指摘されてきた「文法や訳読を重視するあまり、音声面の訓練がおろそかになりがち」という点に対する反省に基づくものと言える。

本取り組みにおいても、教科書の多面的活用の一環として、こうした音声面の練習を取り入れることにした。授業で使用している J102, J307 教室には、島津理化器械株式会社の eCALL システムが導入されており、その一部である「eCALL ソフトレコーダ」を用いることで、従来 LL 教室でカセットテープにより行っていたような訓練が、教授者と学習者の双方にとって、より簡便に行えるようになってきている (図 2)。毎回の授業で、同ソフトの音声ファイルを作成し、学生に音読とシャドウイングの練習を課した。

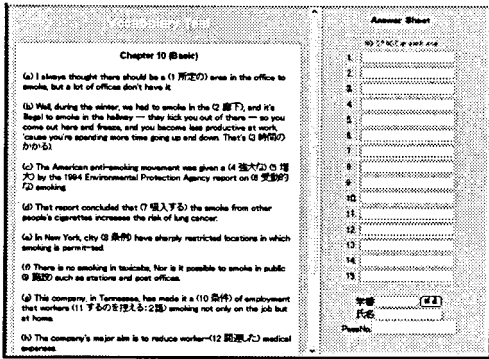


図 1 QM システムを利用した単語テスト

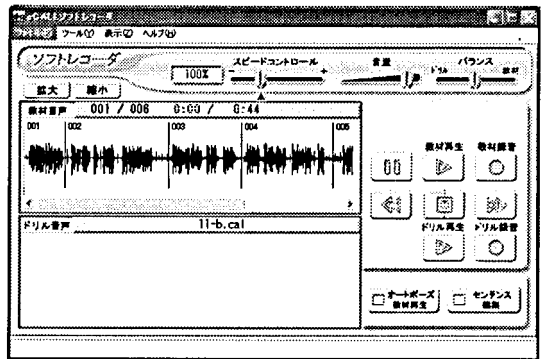


図 2 eCALL ソフトレコーダ

・復習問題

教科書で登場した重要な語彙や表現の定着と応用を目指して、並べ替えと和文英訳による復習問題を作った。和文英訳には複数の解答を用意する必要があるため、教員の手による採点には膨大な手間がかかるが、これを WBT に任せることにより、大量の問題練習を可能にした。YASUDA SYSTEM 内にある和文英訳自動添削システム「サッと英作！」を利用し、毎回の授業につき並べ替え 5 問、和文英訳 5 問の計 10 問を作成し、補助教材として授業の内外で用いた (図 3)。通年では、計 230 問のオリジナル問題を作成したことになる。

・長期休業期間中の課題 (単語の復習用教材)

通年で 1 教員が担当するメリットを生かし、夏季・冬季休業期間中に、それまでに登場した単語を復習するための WBT 課題を作成した。ここでは本学の教養的教育科目「マルチメディア英語演習」でも使われている「VP システム」を利用した (図 4)。同システムは単語の綴り・発音・

意味を、目と耳と手を用いながら学習するもので、1チャプター100語を10語ずつのユニットに分け、単語学習と復習テストを10回行った後、さらに同じ100語をシャッフルして20語ずつに分けた同様の学習を5ユニット行う。最後に確認テストを行い、8割以上正解でそのチャプターは合格となる。単語テストで扱った範囲を中心に、その他教科書に登場する重要語も含め、夏期休暇は300語(3チャプター)、冬期休暇は200語(2チャプター)を選択した。本学外国語教育研究センター所属のサイモン・フレイザー助教授に発音の吹き込みを依頼し、音声付きの教材に仕上げた。

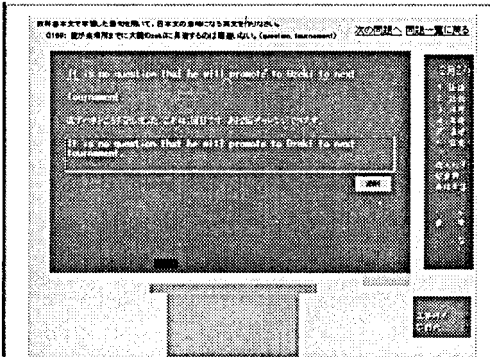


図3 「サツと英作！」



図4 VPシステム

(3) TOEIC 関連教材

・WBTによるTOEICリスニングおよびディクテーション

講読用教材という教科書の性質から、聴解訓練の不足を補う必要があるため、TOEICリスニング模擬問題と、そのスクリプトを用いたディクテーション練習から成るWBT教材を作成し、授業内で活用した。オーサリングシステムとして用いたのは、先述した「QMシステム」に加え、YASUDA SYSTEMのディクテーション自動添削システム「KDシステム」である(図5, 6)。後者では、穴埋めのディクテーションを単語レベルで添削し、その結果をもとに学習者が聞き直しと答え合わせを何度も繰り返していく。学生は聞き取れない部分に自ずと耳と意識を集中させるようになり、試行錯誤を経て自分の解答を完璧に近づけていくのである。

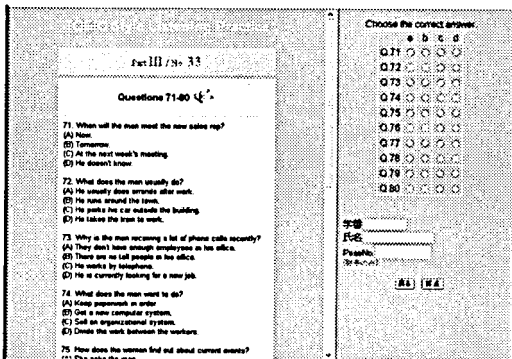


図5 QMシステムを利用したリスニング

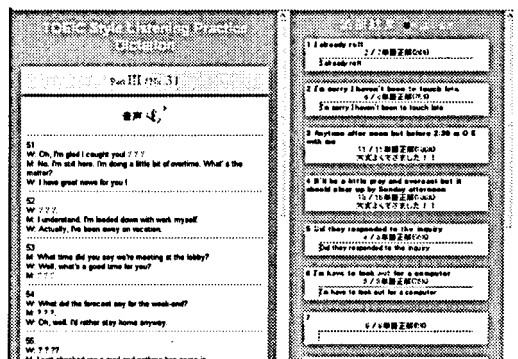


図6 KDシステム

・ TOEIC Bridge テスト

前期第1回と第15回に計2回、TOEIC Bridge テストを実施した。同テストはいわばTOEICの入門版として Educational Testing Service (ETS) が制作し、財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会が実施・運営を行っている。この結果は現在分析中であり、また別に報告の場を設けることとするが、TOEICと同様にスコアが算出され、受験者の英語力の推移を客観的に測れることや、試験時間が60分なので授業時間内に行えること、制作機関と実施機関がTOEICと同じであり、練習用のミニテストとしてふさわしいことから、同テストを採用した。

3.3 毎回および通年の授業の流れ

以上のような教材を利用した、毎回の授業の流れと、その年間の流れについて、それぞれ見てみたいと思う。

(1) 毎回の授業の流れ

担当教員により多少の相違はあるが、毎回の授業は、冒頭の単語テスト、メインとなる教科書の講読および音読練習、各種 WBT 教材による演習という3部構成を取った。それぞれの時間配分は担当教員によって大きく異なるため、一教員の例を挙げれば、単語テスト5分、教科書の講読および音読60分、WBT 演習25分というところである。

単語テストは、1回の授業につき15語前後の重要語句を教科書本文からピックアップし、そのリストを3クラスで共有した。3クラスのうち同時開講の2クラスで問題を共通化した。授業中に次回のテスト範囲の語句が発表されるので、学生はそれらの意味を調べ、単語を覚えておくことが求められた。

教科書の講読においては、訳読を極力避け、パラグラフ・リーディングを中心とする速読練習を重視することを担当教員の共通認識とした。教科書は毎回 Basic か Advanced のいずれかを扱い、2週間で1レッスンを消化するペースで進めたが、講読以外にも多くの内容を取り扱う授業において、限られた時間内で効率よく講読を行うには、訳読よりも速読の方が適当であると判断した。また、学生がTOEIC等の検定試験において長文を読む際には、このような速読の基本的訓練は必須と思われる。こうした理由から、クラスによっては、教科書の英問英答問題を先に読んだ後で本文をスキッピングさせたり、トピックセンテンスを中心とするパラグラフの結束性や一貫性について考察したり、読解のポイントをあらかじめ示したワークシートを中心に授業を展開したり、詳細な訳を求める学生のために訳をプリントとして配布したりといった実践を行った。

音読練習では、教科書本文の1パラグラフ程度の分量を抜粋し、シャドウイングやオーバーラッピングなどの練習を行った。授業時間の関係から、練習時間は短いものとなり、時には練習自体を省略することもあったが、モデル音声の発音やリズムを極力真似しながら、限られた時間内に何度も集中的に練習を行うようにした。

WBT 教材については、クラスごとに扱いは異なるものの、「サッと英作！」による復習問題や TOEIC のリスニング・ディクテーション練習を行った。教員によっては、提出期日を決めて課題の一部としたり、定期的に行う小テストの範囲として出題したりするなどの活用も行われた。学生はこれらの WBT 教材に真摯な態度で集中して取り組む様子が伺え、その反応は後述のアンケート結果にも表れているだろう。

(2) 通年の授業の流れ

通年の授業の流れは、学生に配布したシラバスをもとに作成した以下の表1を参照されたい。

表1 年間の授業計画

<p>*2005年度前期</p> <ol style="list-style-type: none">1. 授業概要の説明；TOEIC Bridge Test (1)2. 単語テスト (1)；The Birthplace of Jazz (B)；WBT 演習 (1)3. 単語テスト (2)；The Language of Jazz (A)；WBT 演習 (2)4. 単語テスト (3)；Lawsuit Society (B)；WBT 演習 (3)5. 小テスト (第2回～第4回までの単語と教科書の内容)；WBT 演習 (4)6. 単語テスト (4)；Sue You Later! (A)；WBT 演習 (5)7. 単語テスト (5)；Is Gun Control Possible? (B)；WBT 演習 (6)8. 単語テスト (6)；Strategies for Gun Control (A)；WBT 演習 (7)9. 単語テスト (7)；Thanksgiving Day (B)；WBT 演習 (8)10. 小テスト (第6回～第9回までの単語と教科書の内容)；WBT 演習 (9)11. 単語テスト (8)；Is Turkey Safe on Thanksgiving Day? (A)；WBT 演習 (10)12. 単語テスト (9)；The Cowboy Tradition (B)；WBT 演習 (11)13. 単語テスト (10)；Life on the Plains (A)；WBT 演習 (12)14. 単語テスト (11)；The Amish Way of Life (B)；WBT 演習 (13)15. TOEIC Bridge Test (2)；授業アンケート <p>テスト期間：小テスト (第11回～第15回までの単語と教科書の内容)</p> <p>*夏季休業期間</p> <p>WBT による前期単語300語の復習</p> <p>*2005年度後期</p> <ol style="list-style-type: none">1. 授業概要の説明；単語復習テスト (夏季休業期間中の課題の単語)2. 単語テスト (1)；Amish Values (A)；WBT 演習 (1)3. 単語テスト (2)；Shopping for a Christmas Tree (B)；WBT 演習 (2)4. 単語テスト (3)；Big Shopping Season at Christmas (A)；WBT 演習 (3)5. 単語テスト (4)；Seeking a Better Life (B)；WBT 演習 (4)6. 小テスト (第2回～第5回までの単語と教科書の内容)；WBT 演習 (5)7. 単語テスト (5)；Illegal Immigration (A)；WBT 演習 (6)8. 単語テスト (6)；Cocaine Babies (B)；WBT 演習 (7)9. 単語テスト (7)；Teenage Drug War (A)；WBT 演習 (8)10. 単語テスト (8)；Your Cigarettes or Your Job (B)；WBT 演習 (9)11. 単語テスト (9)；The Anti-Smoking Situation in Japan (A)；WBT 演習 (10)12. 小テスト (第7回～第11回までの単語と教科書の内容)；WBT 演習 (11)13. 単語テスト (10)；The Era of Designer Vegetables (B)；WBT 演習 (12) <p>(冬季休業期間中：WBT による後期第2～13回までの単語200語の復習)</p> <ol style="list-style-type: none">14. 単語テスト (11)；The Road to a Better Quality of Life (A)；WBT 演習 (13)15. 単語テスト (12)；Volunteer Activity (B)；授業アンケート <p>テスト期間：小テスト (冬季休業期間中の課題の単語と第13回～第15回までの教科書の内容)</p>

注：(B)=Basic (A)=Advanced

3.4 成績評価

今回はクラス間の評価基準を特に統一せず、各担当教員が、各種小テストの結果、課題の提出状況および受講態度等を総合的に判断し、成績評価を行った。

前述のように、学期末テストは学期全体の内容を試験範囲とはせず、第3回の復習小テストとしたため、評価全体に対する学期末テストの割合は従来のそれと比べると低くなっており、むしろ学期を通じた授業への取り組みを評価する形とした。

4. これまでの実践の成果および学生の反応

ここでは、これまでの取り組みの成果を表すものとしていくつかのデータを示したい。まず、学生の普段の授業への取り組みを表すデータの一つとして、授業にて毎時行っている単語テストの結果を示す。次に、前期の学習内容を復習する目的で行われた夏休みの課題への取り組みの結果として、その確認テストの成績を示す。最後に、前期末に行われた授業評価アンケートより、学生の自由記述によるコメントから、CUPに直結する活動に対する学生の反応について報告する。

4.1 毎時の単語テスト

各クラスにおいて毎時単語テストを行ってきたが、3クラスのうち2クラスにおいて、前期の第8回の授業（単語テスト(6)）より、共通の形式によるテストを用いて実施した。ここではその2クラスについて、共通で行い始めた回から本稿の執筆段階までに行われた11回分の結果を報告する。

各回でテストの対象となった単語数に違いがあるため、点数を100点満点に換算したものに基づいて、各回の平均値と標準偏差を表2に示す。

表2 単語テストの記述統計

	平均値	標準偏差	
前期	単語テスト (6)	73.25	18.39
	単語テスト (7)	83.32	12.76
	単語テスト (8)	78.62	17.34
	単語テスト (9)	84.53	14.90
	単語テスト (10)	82.79	15.41
	単語テスト (11)	82.76	15.27
後期	単語テスト (1)	72.23	16.53
	単語テスト (2)	83.95	14.71
	単語テスト (3)	86.77	16.00
	単語テスト (4)	78.70	20.50
	単語テスト (5)	76.08	24.08

表2を見ると、回ごとに平均値に変動はあるが、概ね70点台から80点台を推移していることが分かる。ただし標準偏差が大きいことから、個人により学習の度合いが大きく異なっていると言えるだろう。

この結果は今後の課題であろう。授業への準備は学生の自主性に依るところが多く、より積極的な取り組みを促す工夫が必要となることを示唆していると言える。

4.2 夏休みの課題

前期の復習として行われた夏休みの課題では、各チャプターの最後に確認のテストを行った。各20問で、80%以上（16点以上）を合格とした。ここではその結果を示す。

表3は各チャプターの平均値と標準偏差、表4は点数ごとの人数とパーセンテージを示す。なお、同じ範囲を複数回行った者が数名いるので、人数は延べ数である。

表3 確認テストの記述統計

	chapter 1	chapter 2	chapter 3
平均値	19.49	19.49	19.49
標準偏差	0.82	0.83	0.83

表4 点数ごとの分布

	chapter 1		chapter 2		chapter 3	
	人数	%	人数	%	人数	%
16点	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
17点	5	3.73%	3	2.29%	8	6.25%
18点	12	8.96%	13	9.92%	11	8.59%
19点	30	22.39%	26	19.85%	25	19.53%
20点	87	64.93%	89	67.94%	84	65.63%
総計	134		131		128	

表3より、各回の平均値を見ると、どのチャプターにおいても満点（20点）に近く、標準偏差も小さいことから、多くの者が高い正解率を見せていることが分かる。さらにこれを支持するデータとして、表4より点数ごとの人数とパーセンテージが分かるが、どの回においても80%以上の者が19点または20点の範囲にいることが分かる。

この結果は、前期分の復習として行われた学習課題が、高い成果を挙げていると言えるだろう。

4.3 授業への反応

前期の最終授業において、教養教育の外国語科目では学生による授業評価アンケートが行われた。これは外国語科目全体で行われたため、質問項目は必ずしもCUPに直結するものではないが、アンケートの一部として、学生が自由記述によりコメントを記入する欄があり、そこへ寄せられたコメントのなかにはCUPに関係する取り組みについて述べているものがあった。ここでは、そのコメントから学生の反応について報告する。

CUPに関する取り組みについて述べたコメントは、全部で8件あった（ひとつのコメントのなかで複数のことについて述べているものもあるため、以下に報告する件数は延べ数である）。そこで触れられているものは、「毎時の単語テスト」、「TOEIC リスニング」、「ディクテーション」、「サッと英作」に関するものであった。内容はほとんどが肯定的なもので、授業でPCを用いた活動が楽しいといった記述が5件見られた。また、これらの学習が成績向上に役に立ったという内容のコメントが2件あった。ただし、逆に否定的なコメントもあり、量が多い（1件）、キーボードの操作に不慣れなので入力に時間がかかる（1件）というコメントもあった。加えて要望とし

て、授業の中でパソコンによる学習の時間を増やしてほしい（1件）という声もあった。

コメントの総数は少ないが、その多くが肯定的な反応であったことは、この取り組みが概ね受け入れられていると解釈できる。しかし、一方で少ないながらも否定的なコメントもあったことは見逃せない。学生にこれらの取り組みの意義を理解してもらうために、何らかの方策をとることが必要であることを示唆しているほか、パソコンの操作に不慣れな学生へのケアなど、よりきめ細かいサポートが必要となることを示していると言えるだろう。

5. 課題と今後の見通し

今年度の授業実践を通して得られた課題と今後の見通しについて、設備面、制度面、教員の実践面から取り上げる。

まず、設備面については、学生が個人所有のノートパソコンで課外学習を行うにあたって、学内のインフラ整備が未だに不十分であることが挙げられる。本プロジェクトの趣旨を考えると、学内においては情報コンセントや無線のアクセスポイントにより、また、学外からはインターネットを経由したVPN接続により、学内LANへの接続を保証するのが理想である。しかしながら、現状は、そのようなネットインフラが整備されていない上に、VPN接続の設定も多くの学生にとっては敷居が高いものであり、仮に設定を行った場合においても回線の現状では接続が不安定で使用しづらいことが多い。

また、制度面においては、クラス間での授業進度や授業内容の統一を図るためにも、開講日時を統一することが理想であるにもかかわらず、CALL教室数の不足などにより、今年度は3クラス中、同時開講は2クラスに留まった。このため、クラス間での授業進度および補講回数の不均等が発生しており、テスト内容の統一も困難となった。

そして、最後に、教員の実践面では、担当教員間の意識統一と連携は極めて円滑に行われたが、初の取り組みということもあり、次年度以降、更なる向上の余地があると考えられる。例えば、授業内において教員の介入なしに単にWBTを導入しても課外学習の促進にはつながらないことは、担当教員間で一致した認識である。今後においては、CALLによる練習時間をいかにバランスよく確保し、課外学習による教材消化の習慣をいかに定着させていくか等について、十分な話し合いを行う必要がある。

また、本取り組みの成果については、まだ十分に検討するに至っていない。今後の継続的な取り組みを通して、本プロジェクトにおける具体的な取り組みが、学生の英語力および動機づけにどのような効果をもたらすかについてTOEICスコアをはじめとするデータ収集やその分析から明らかにする必要がある。

このように未だ多くの課題が残されているが、今後、継続的に授業実践をおこなうことにより、将来的に、本学のCUPが目指すネットワーク環境のもと、多くの学生がパソコンを所有し、また、ネットワーク環境もより良いものになりつつある状況の中で、英語教育ではどのような実践を行うことができ、学生の英語力を伸長することができるのかを検討する必要性がある。

今後、来年度も別の学生を対象に予定されている本プロジェクトを継続的に実施することにより、本報告が示したネットワークを活用した英語授業の方向性を更に進める予定である。

ABSTRACT

Classroom Practice in English Classes Based on the Hiroshima University Campus Ubiquitous Project: Report I

Kazumichi ENOKIDA

Hiroaki MAEDA

Takamichi ISODA

Kenji TAGASHIRA

Institute for Foreign Language Research and Education

Hiroshima University

This article provides an outline of the classroom practice in English classes based on the Hiroshima University Campus Ubiquitous Project and presents the details of the teaching syllabus / procedures and teaching materials for WBT (Web Based Training).

In this project, schedules are set up so that the same three teachers will take charge of the same English classes (Communication IB and Communication IIB) during the course of the whole year. The students are first-year students in the Department of Economics, and each class is conducted by means of the CALL (Computer Assisted Language Learning) classroom, as well as an online network system. Original materials and assignments for students are also developed, and presented on the Web. The students are encouraged to use their own laptop to work on them outside the class. The results of a questionnaire and the class assignments during these courses reveal that the reaction of most students to this project appears to be very positive. Finally, the future direction of English classes using Hiroshima University's online network system is indicated.